日本行動計量学会会報
第16号
1978年11月8日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

人間の評価の利用

茅陽一

筆者は、これまで地域や社会などの将来展望用モデルの作成にたずさわってきた一人であるが、最近は人間の評価を総合化して将来展望を行なうという問題に興味をもつようになった。

本来、人間の意見は当然のことながら主観というバイアスを背負っており、できることなら客観的な計量可能な変数群の分析から答をひきだすことがのぞましい。しかしそのような分析を行なうにはあまりに対象が複雑多岐であり、むしろ対象を熟知した専門家の意見、場合によっては「かん」が問題の把握にかえって有効であるということがしばしば起こる。

この一つのよい例が技術予測である。たとえば新エネルギーの技術開発がどのように進むであろうかという問題は、国家にとっても、またエネルギーに関与する諸産業にとっても重要な関心事であるが開発の進行状況を研究投資、研究労働力などの客観計量型の変数のみで説明することはきわめてむずかしい。むしろ、現在の研究の進捗状況、周囲条件などを知悉した専門家の意見の方が信用できようし、またそれを得ることは数量モデルを作るに比してはるかに簡単である。

このような事情のために、過去における技術予測は、専門家意見の収集・整理を前提としたものが多い。よく知られるデルファイ法はその典型例で、過去二回にわたる科学技術庁の予測もこれにもとづいていることは読者も御存知であろう。また、米国で比較的よく行なわれるPERTの拡大手法であるGERT、PAFFといった方法も、技術発展の各部・各段階における可能性を期待必要年限や確率の形で専門家に評価して貰うものである。社会システムのモデル手法としてよく使われるシステム・ダイナミクスも非計量性の高い変量を大胆にとり入れることが多いが、その場合の計量化はやはり人間の判断によるのが普通である。

筆者は、人間の評価・判断を利用することの有用性を高く評価する一人であるが、ここで最近の傾向で危倶を感ずるのは、その取扱いが安易に行なわれすぎてはいないかという点である。人間の評価は、有用な情報は含んでいる一方、さまざまな誤差を含み、また合理性を欠く場合がある。多数の事象の順位づけを一対比較の形で行なわせると、推移律の成立しない回答を得ることが多いが、これは人間判断の非合理性をよく示している。したがって、人間の評価を利用する場合には、その特性をよく分析し、その誤差を排除し、あるいはその誤差に対し感度の低い結論をひきだす努力をする必要がある。このような努力は、しかしまだ充分なされているとは思えない。

この分野は、やはり行動計量学の重要な一分野であり、本学会員の方々がこれに興味を抱き、人間の評価をより有効に、より誤りなく利用する方法を開発されることを願ってやまない。

（日本行動計量学会理事・東京大学工学部教授）

学会誌への投稿を歓迎！

和文誌「行動計量学」、欧文誌「Behaviormetrika」の発行回数を増す案が検討されています。編集委員会が悲鳴をあげるような多数の投稿論文を歓迎します。どしどしお送りください。（投稿資格は会員であること。既刊誌所載の応募規定を参照してください。）

第六回総会報告

実行委員長　池田　央

第六回日本行動計量学会総会は一九七八年九月六日から八日まで三日間にわたって立教大学で開かれました。昨年秋肥田野総会担当理事より御相談を受け、微力ながら今年度総会開催は立教大学でお引受けすることにしました。学会員である当方のスタッフも数少いため、当社会学部岡太彬訓氏のほか、あらたに入会参加いただいた文学部石井巖氏と、近隣の早稲田大学浅井邦二、日本女子大学岡本栄一、梶田叡一、東京理科大学佐伯胖、中央大学吉田正昭各氏の応援をいただいて実行委員会を組織し、何とか実施にこぎつけました。実務は学生会員である永松純、今泉忠両氏の献身的な努力ならびに機械に明かるい立教大学講師放送作家渡辺忠政氏のアドバイスによって切り抜けることができました。

参加者の総数は一九三名で、うち正会員一五八名、準（学生）会員二八名、非会員　七名で、前回の岡山総会の出席者（一七四名）に比べて一九名の増、前々回の東大総会の出席者（二一二名）に比べて一九名の減でした。当初二〇〇名以上の出席者を見込んでいましたがそれに及ばなかったため、会計上はやゝ苦しい結果となりました。しかしここ数年の総会をみるところ、参加者の数もほぼ安定してきており、発表数も二つの特別講演、六つのパネルディスカッションのほか、五八件の個人研究発表があり、徐々にではありますが、毎年増加傾向を示しているのはよろこばしいことだと思います。

第一日目は午前中、尺度構成・多変量解析と、社会医学・臨床医学の二つのセッションが平行して行われ、午後は本年度の総会、ならびに六人の講師によるパネルディスカッション「因果性をめぐる問題」の発表が行われました。指定討論者をはじめ会場からの発言者も加えて活発な討議がなされ、総会を盛り上げるのに役立ったと思われます。

第二日目は、午前中臨床・医用電子および社会・心理の二つのセッション、そして立教大学総長の出席による懇親会をはさんで、午後は「質と量」「予知と予防」「患者と医者と治療と」の三つの特別テーマによる個人発表が行われました。

第三日目の午前は、実際問題に直接タッチされかつ行動計量学とも関係が深いと思われる御二人の講師をお迎えし（科学警察研究所池之上慶一郎氏「交通流の計測と制御」、東京外国語大学安倍北夫氏「災害の行動科学研究の現況」）現場からの生々しい有益なお話を伺うことができました。午後は数理統計・プログラミングおよび、心理・教育・言語の二つのセッションで研究報告がなされ、熱心な三日間の総会の幕を閉じることができました。

期間中心配されていた暑さもやわらぎ、比較的しのぎやすい日々を送ることができたのは幸いでした。しかし夏休み中のこともありサービス運営等で多くの参加者に御不自由をおかけしましたことは平に御容赦願いたく存じます。それに致しましても、一応大過なく総会を終えることができましたのは、司会者をはじめ、参加者各位の御協力ならびにアルバイト学生諸兄姉の努力の賜と感謝しております。これをよい経験にして、来年度はまた一層充実した総会が実現できますよう期待して報告を終えたいと思います。

（立教大学社会学部教授）

第九回講習会の案内

〝医学生のための行動計量学〟

昭和五十三年十二月二十二日から三日間、関西地区大学セミナーハウス（神戸市）で開催します。参加費一万二千円（テキスト代、食費、宿泊費を含む）。医学生以外の方も歓迎します。

申込みはハガキ（氏名、住所、電話番号、所属など）で左記へお願いします。締切り十二月五日。

（〒五五三大阪市福島区福島一―一五〇、大阪大学医学部第一内科、医学生のための行動計量学セミナー事務局、℡（〇六）四五一―〇〇五一、内線二二〇六、係・楠岡）問合せもここへどうぞ。

◎会員（十月三十一日現在）

（正）八一七人（準）一六五人

（賛助）三四法人

会議議事録

◇理事会（九月六日）
於　立教大学セントポール会館
出席者　理事　十五名

1. 五十二年度決算報告について事務局より青山・宮原両監事の監査を受けたむね説明があり、これを承認、総会に提出する。
2. 山本編集担当理事から欧・和文誌合同幹事会（八月九日）の報告があり、これを了承。欧文誌の発行回数を増す（年二回）問題、および査読のあり方・編集幹事の権限など編集上の諸問題について、なお継続して欧・和の両幹事会で検討を加えることにした。
3. 来年の第七回総会開催校については、総会担当の肥田野理事が十一月末決定を目標に候補校と折衝する。
4. 各種委員会報告

五十三年度予算案（総額四百八十万円）については、前回理事会で承認ずみの原案どおり総会にはかる。

◇運営委員会（九月六日）
於　立教大学セントポール会館
出席者　運営委員　十三名

1. 本年度の秋季講習会案について担当の井上委員が説明、原案どおり決定した。テーマは「医学生のための行動計量学セミナー」とし、十二月に関西地区大学セミナーハウス（神戸市）で開催する。内容としては、基礎医学、社会医学、臨床部門での多変量解析を主体とする統計学を予定する。
2. 小グループ研究会について、近藤委員から、活動状況確認のためアンケート調査実施中であるが無回答グループが多いむね報告があり、なお再確認の努力をすることにした。
3. 次回月例シンポジウムについて、丸山委員から林理事長をオーガナイザーにして十一月実施を目指し企画中との報告があり、これを了承した。なお、担当委員に柳井晴夫氏を追加する。
4. その他、総会参加者を拡大する問題、学会運営に新機軸を打出す問題、運営委員の若がえり策などについて意見を交換し、今後検討することにした。

日米コンファレンス
"人癌の研究における生物統計学"より

国際会議

柳本　武美

標記の会合が本年五月二十二日から二十五日まで、広島の放射線影響研究所（元ABCC）で開かれた。日本側の参加者は統計学者と疫学者であり、一方米国側は主として生物統計学者が参加した。この陣容の違いは両国の実情を如実に反映したものである。日本側の参加者がより密接に、さらには有機的に共同研究がなされることが望まれる。またそのことがこのコンファレンスの大きな目的であったようである。

内容は大まかに三つにわけられる。第一は日米における統計学に関連した癌研究の概要、第二は癌の疫学における生物統計学の手法、そして最後は癌地図とコンピュータ・プログラム・パッケージについて報告と熱心な討論が繰りひろげられた。

日本側の報告は参加者の顔ぶれから、やはり二通りにわかれていた。その中でもなんとか互いの歩みよりがうかがえた。必ずしもコンファレンスの目的にはそぐわなくても報告者のオリジナルな研究の報告が多くなされた。

米国側では生物統計学の代表的な手法が紹介され、必ずしもオリジナルな内容ではなかった。しかし細かい点にまで配慮した議論は層の厚さを示した。

報告集は「環境保健の展望」（NIHのジャーナル）にて、公表される。

コンファレンスの後は参加者が九州大学を初めとして、関東以西の各地で交流を行なった。この際米国側の参加者から、生物統計学の必要性そして日本での普及について積極的な申し出がなされた。米国側の支援も提案された。

ひるがえって我が国の生物統計学の実情を見ると、その専門家が少ない一方で、関連研究者の統計学者への要求は極めて強いものがある。外から刺激をまつまでもなく、生物統計学の我が国での発展のエネルギーは大きい。この方面の研究を目指す者のあるいは偏見かも知れない感想である。（日本行動計量学会会員・統計数理研究所第2研究部）

〃人工知能〃国際会議（一九七九年）に研究発表の申込みを！

本学会協賛の第六回人工知能国際会議（略称IJCAI-79）が昭和五十四年八月二十日から五日間、東京で開かれます。本学会の会員はふるって発表してください。

募集する研究発表の内容は、つぎのとおりです。人工知能の基礎理論、問題解決と探索・自動プログラミング・ファジィ論理・定理の証明、知識の表現と獲得、自然言語（音声と文章）、視覚・イメージ理解システム、ロボットと生産技術（身障者のための知的補助手段）、人工知能用ソフトウェアとハードウェア、データベースに対する知的アクセス、人間機械系の知的構成、人工知能の一般的応用・特殊用途のシステム、心理学と人工知能・認識プロセス、人工知能と社会の関連、など。

発表論文（英文）の送付期限は昭和五十四年一月末、採否決定は五月一日です。申込みの詳細は、左記へハガキでお問合せください。

（〒一〇〇東京都千代田区永田町二ー六ー一、電子技術総合研究所数理基礎研究室、岩坪秀一氏）

会員の声

〃行動計量学〃のこのごろ

丸山　久美子

月日のたつのは早いもので、本学会も発足して六年目を迎える。おもえば、最初の二、三年の間は会員を増すことに努力を傾注していた観があった。〃行動計量学〃なる耳新しい響きに対する興味・関心も手伝ったのであろうか、会員数は順調に伸びて、現在では千名の規模になった。本学会もようやく安定した状態になったように思われる。しかし、一方では、ちょうど六年目あたりがあらゆる意味で中だるみのムードが蔓延する時期だともいわれている。

そんなわけで、今年の第六回総会の様子が、始まる前、いつになく妙に気になったものである。

ふたを開けてみると果たせるかな、最初に懸念したように総会に参加する人数は従来のそれを下廻り、討論の風景も以前よりは熱気に乏しいような印象があった。総会の席上で理事長は、もっとも危険で大事な時期にさしかかった行動計量学会のあり方について述べておられたが、まさに本学会はその危険の渕に近づこうとしているのであろうか。

否――そうではない。一見、静かな雰囲気でも、研究発表の内容は当初と比べてかなり安定・充実しており、行動計量学のイメージが人々の間に定着したのだという感慨を、わたしは強く抱いたのである。

行動計量学会は、最初「応用多変量解析シンポジウム」をその母体としたせいか、多くは応用多変量解析のイメージと行動計量学のそれとが重複しているようなところがあった。六年を経過すると、そこから脱皮して、次第に行動計量学独自のイメージが形成されてきたことに気がつく。研究発表の内容から、そこに新しいセンスの充満した雰囲気が感じられるのである。いうなれば、不特定多数の物見遊山的興味や関心が薄れて、本質的な部分に深くくいこんで、それを究めようとする暗黙の意志が、会員相互の間で働きはじめている。それこそ、中だるみでもなんでもない、着実な進歩ではなかろうか。わたしは、それを知って大いに安心した。たとえそれが垣間みたきざしであったとしても、それにより行動計量学の土壌が確立し、それを出発点として、さらに新たな視点から研究範囲が拡がり定着する可能性を期待できるからである。（日本行動計量学会会員・青山学院大学）

☆会員の声をどしどしお寄せください。　運営委広報係

事務局から

▼たびたびの催促で恐縮ですが、本年度学会費（正会員四千円、準会員二千五百円）を未納の方は至急、ご納入ください。送金は振替（振替番号、東京八ー一四八〇五六、日本行動計量学会）をご利用ください。

▼第六回総会（立教大）の発表論文抄録集を、ご希望の方に有料（二千八百円、送料含む）でおわけします。送金は前記の振替で。

▼また、過去の総会の抄録集の残部もおわけできます。代金（送料を含む）は第一回（統数研）千円、第二回（統数研）千五百円、第四回（東大）二千円、第五回（岡山大）二千円です。なお、第三回（青山学院）は残部がありません。